

佐高信  
経済評論家

『週刊プレイボーイ』の対談で、いわゆる「国策調査」で逮捕された鈴木宗男が私に、「逮捕されるまでは私も検察は正義だと思っていた」

と語った。しかし、本当にそうなのか？

『週刊朝日』の二月一九日号で、ジャーナリストの上杉隆が「東京地検の『抗議』に抗議する」を書いてる。

前号で上杉が、検察は何の罪もない若い母親である女性秘書を騙して呼び出し、一〇時間近くにわたって「監禁」し、「恫喝」を繰り返すという卑劣な取り調べを行ったとレポート

## 一切報道されない検察による「犯罪行為」 批判を封じているのは記者クラブの存在か

したら、それは「全くの虚偽である」という抗議書がFAXで送られてきたというのである。

上杉によれば、それは「反論するのにも気が引けるほど、お粗末な代物だった」。

まず、再三、取材を依頼しているのにもかかわらず、「司法記者クラブに所属していない週刊誌に対しては一律お答えしない」と回答を拒否しながら、突然、次席検事名で「抗議」してくる。

しかし、前々号で報じた議員会館の石川事務所への捜査令状を示さない「違法捜査」や、前号の、少なくとも四時間に一度の休憩をと

ることや、長時間の取り調べを禁じた最高検察庁の通達を無視した「脱法捜査」については触れていないところを見ると、これは認めたいところか、と上杉は皮肉る。

この「抗議」を読めば読むほど、逆に、いかに取り調べの可視化が必要かということがわかるが、それも一刻を争う感さえする。

その日、当該検事は女性秘書に、「午後一時四五分に来て下さい」と出頭を命じたという。

抗議書には、「何点か確認したいことがある」旨を告げて来庁を依頼した、とあるが、「一

トも羽織らず、ランチバッグひとつで検察庁に出かけた彼女は、それから、ほぼ一〇時間帰れなかった。いや、帰されなかった。夕刻、彼女が保育園で待っている三歳と五歳の子どもの迎えの手配をしたいと哀願したのに、担当検事の民野健治は、

「なに言っちゃってんの。そんなに人生、甘くないでしょ」

と言い放ったという。

これに対しての「抗議」はこうである。

「夕刻、供述人から、子供の迎えもあるので帰りたい旨申出があったので、当該検事が『家

族の誰かに代わりに迎えに行ってもらうことはできませんか』と尋ねたところ、供述人が夫に電話をかけ、その結果、子供の迎えの都合がついたことから事情聴取が続けられたものであり、その際、供述人が子供の迎えだけは行かせてほしい旨発言したり、取り乱したりしたことはない」

しかし、最初に携帯電話の電源を切るよう命じていること、繰り返し要請した弁護士への連絡も、解放直前の午後一〇時半になって初めて許されていることなどからも、この抗議のウソは明らかだろう。上杉は書く。

「取り調べ後、病院で診察を受けた女性秘書には診断書が出され、いまだに精神的ショックから立ち直れず、完全な職場復帰を果たせないうつ」と。

彼女は検事から、こう怒鳴り続けられたのである。

「ういんだよう！ とにかく、本当のことを言えばいいんだよ！」

そして、上杉は次のような疑問を発する。

なぜ、この検察の「犯罪行為」を報じる新聞やテレビは皆無なのか、と。ワイドショーなど飛びつきそうなネタなのに、なぜ、無視なのか？

それは、このニュースを報じると検察批判になり、検察と「共生関係」にある記者クラブ自体の自己否定になってしまっからだ、と自ら絵解きする。そのため、この国では、この「事件」が存在しないことになってしまっているのである。